

夜の住宅街。この時間だと、住宅街は死んだように静かであった。
そんな場所の通りを、一人のスーツ姿の女性が歩いている。

仕事帰りだと思われるその女性を、夜が生み出す闇の中に潜^{ひそ}んでジッと見つめている存在がいた。

女性はソレに視線を向けられていることに気づかない。

ソレは闇から飛び出し、女性に襲いかかろうとしたが……突然、背後から衝撃を受けて転倒した。転倒した瞬間、小さく短い声を発する。

女性は足を止めて後ろを見た。だが女性の視界には、なにも入ってこない。
気のせいかと思い、彼女は再び歩き出す。

ソレはなにが起きたのか分からないという顔をしていた。背後に視線を向けると、そこには一人の青年が立っていた。

整った顔立ちの、身長百八十センチほどの二十五歳くらいの青年。

黒い開襟^{かいきん}シャツに黒いジャケット、黒いスラックスに革靴も黒という、黒一色の服装だ。

「よう、食事の邪魔をして悪かったな」

黒一色の美形の青年……紫崎^{しざき}久司^{ひさし}は、蹴飛ばしたソレを見下ろしながら言う。

ようやくソレは、久司に蹴飛ばされたのだと理解する。

ソレは鋭い牙をむき出しにして、「グルグルッ！」と唸^{うな}った。

ソレ……異形^{いぎよう}の怪物とでも呼ぶべき存在。百五十センチほどの大きさの、全身を黒い毛で

覆われたサルに似たもの。真紅の目が、久司を鋭く睨む。

サルに似ているが、サルではない。サルとは異なるもの。

ソレは妖魔と呼ばれる異形の存在。

サルに似た姿の妖魔……下級の妖魔は素早く立ち上がると、久司と対峙する。

下級の妖魔は一体だけではなかった。夜が生み出す闇のあちこちから、同じ姿の下級妖魔がゾロゾロと姿を現す。

妖魔たちは久司を包围する。

異形の怪物に包围されても、久司は冷静であった。

久司は右手をブツと振る。すると、彼の右手には一本の刀が握られていた。

刀身がギリリと光る刀を両手で構える久司。

久司が刀を構えたのを見て、下級の妖魔たちは怯んだ様子を見せた。

彼がただの人間ではなく、自分たちの天敵だと知ったためだ。

天敵ではあるが、数は一人。妖魔たちは勝てると見込んだのだろう。久司に向かって跳びかかる。

久司は冷静なままだ。冷静なまま、刀を振る。

妖魔の一体が、刀によって体を斬り裂かれる。地面に落ち、そのまま動かなくなる妖魔。

久司はもう一度、刀を振る。さらに妖魔が一体、地面に落ちた。

刀が振られるたびに、下級の妖魔が一体また一体と斬り倒されていく。

妖魔も攻撃するが、久司にその攻撃は当たらない。久司は下級の妖魔の攻撃をヒョイヒョイと身軽にかわす。

攻撃をかわした直後に刀を振り、妖魔を斬り倒す。

多数いた下級の妖魔は、ついに一体を残すだけになる。

最後の一体は久司に背を向けて逃げようとするが、彼はそれを許さない。後ろから妖魔を

斬る。

わずか数分で、多数いた妖魔は全滅した。

久司は周囲の気配を探る。もう妖魔の気配は感じない。

刀を持つ右手をブンツと振ると、出現した時と同じように、刀はフツと消えた。

妖魔を斬り倒した久司は、妖魔の死体を残して、その場から去る。

死体と化した妖魔に変化が生じた。死体の表面が、灰で覆われていく。短い時間で、妖魔

の死体は灰の塊かたまりと化す。

風が強く吹く。妖魔の死体だった灰の塊が崩れ、四散する。

そこに妖魔と呼ばれる異形が存在していた痕跡こんせきが消えた。

妖魔という異形がいて、それが久司という青年と戦っていた……などということは、誰も信じられないだろう。